

イワシの煮たのを食いたい、と思ったらこの文章まで書きたくなった。前にもサンマの話を書いたが、どうもオレこれらの青魚は好きだが、一番はイワシですね。サンマは時々でいい。イワシのお気に入りには煮つけ。甘辛く煮たものが酒にもご飯にもいい。昔はご飯なんて言わなかったのに、年だねえと “がはは” である。

昔、魚屋のおっさん（下の図版は、イワシを洗うオヤジ）がイワシの頭を取ってから、腹を裂き、水道の水を細くして、時間をかけて一匹づつ腹を洗っていた。「イワシは洗うほどにうまくなる、うまくなって、タイになる」と洗いながら教えてくれた。オレ、今でもそうしているが、この辺りでは“トレトレのピチピチ”ではなくて、相当くたびれたやつしか手に入らないのが残念。その魚屋もずっと前に閉じてしまった。

若いころ仕事で広島に呼ばれ、夕方帰る時に駅前の赤ちょうちんに寄った。当時は「ちょっと飲みたい」と元気な盛りだった。メニューの番外編に“イワシ”と書いてあるので「イワシちょうだい」というと「どっち」とお姉さん。怪訝な顔をしていると「刺身、フライ」と言われて「両方」と答えた。その両方のうまいこと、と感激。大阪では新鮮なイワシなぞ当たらないものね。何度も広島に行ったので何度もいただいた。広島はイワシは小ぶりなやつだ。午前中、街中を歩いていると、自転車の行商おばさんが、小刀のようなもので、イワシを刺身にしていた。小ぶりなイワシを何匹も、三枚におろすのは、根気のいる作業と思うが、うまいものを造るためには、おばちゃんががんばらねば、そして喰うやつはうまいと叫ぶ。もう長く広島には行ってないが、今でもそんな光景あるのかなあ。無くなっていたらそれは残念。行商のおばちゃんなんて、何百年も続いてきた風景だと思うが、昨今の急激な変化、いちばが無くなり、スーパーマーケットばかりになってきているので、チト心配。どなたかそんな情報知らせてくれますか。

調べてみたら

真鰯	・まいわし	(ナナツボシ)	15~20センチ
片口鰯	・かたくちいわし	口の下部が小さい	瀬戸内地方でよく獲れる 10センチ
潤目鰯	・うるめいわし	眼が潤んだように見える	干物向き

0044 民主主義って何やろうね

民主主義って何やろうねと考えてみた。オレが、人間が生きていくということで考えてみた。オレの周りには、知っている人、話した事のある人が何百人もいる。そんな何百人の人それぞれに、違う。違うのは当たり前。能力も、貧富も、感性も、思考も、習慣も、価値観も・・・。絶対的な平等なんてありえない。

“百姓は隣の人と同じ事をしていたらいい” 何百年と言い継がれてきた言葉だそう。同じ事をしていたら、間違いはない。自分でかってな事を考えない方がいい、自分でかってに行動しない方がいい、と何百年も米を作ってきた。この半世紀で、コメの価値が変わった。価値とは価格の事ではなくて、日本では何百年かの間、コメがお金の代わりをしてきた。百姓は農作物を作るのが本当の姿、それが今、今までのようにコメが日本の基軸産業ではなくなって、百姓という仕事がおかしくなってきた。ちょっと脱線しましたが、人と人と同じ事をする、同じであるということと、平等とは違うのではと思います。

物事を習得するのに、出来あがった物のマネをする。何百年か、かかって出来あがった、見える物も見えない物も、その姿、形、考え、感性の真似をして、マネの練習をする。先達の言葉を頼りに、先達の形、姿、考えをコピーする。本当に何百年もかかって、出来あがっている？本当に完成している？このあたりに、疑問を持たないほうがおかしい

のでは・・・。何事も出来あがるとか、完成するとか、その瞬間以外ではあり得ないのですね。その瞬間にそう思っても、時が、場所が、人の考えが変われば、出来あがっていない、完成していないとなるのです。出来あがっている、完成している、という幻想にとらわれず、自分で考えて、練習、習熟しようということですかね。

オレ今まで、なんとか教（きょう）とか、なんとか道（どう）とか無関心に生きてきた。おそらくこれからもそうだろう。梅原先生論（これはあまり分かっていない、オレの話として聞いて下さい）東方（東洋とは言わず）には、そして日本には、仏教と儒教と道教があった。仏教は欲望を否定するとか、抑圧するとかを教えた。儒教は人間個人ではなくて、人間関係を教えた。道教は自然崇拜、自然に随順すること教えた。西洋は人間を、個人を大切にする。これだけでは何のことやら。この先生に興味を持って、おもしろく読んでいます。上っ面読みではイカンと、反省。

日本人は、今までの古い因習は、ほどほどに聞いた方がいい

日本人は、個人差を認識すべし 個性を大事にしよう。

日本人は、欧米の真似ばかりはいかがかな 特に市場主義はいかがかな

「富のないところに、徳はない・・・」なにを・・・オレには、徳がないのか。がはは。

図版は、本日の定点観測。

0045 遺言書にオレの名が 060312

家庭裁判所から封書が来た。「何か悪いことをしたかな」と恐る恐る開封すると、“家裁は、遺言者の法定相続人の皆さんに対して・・・その内容を確認、記録にとどめるために〇日、家裁に、出席してください・・・必ずしも出席いただく義務はありません・・・”と書いてあって、遺言書を残した人の名や内容は書かれていない。弟から、「何か言ってくるから無闇に押印するな」と言われていた。「あれ叔父の？」との問いに、弟が「叔父が、何かを残してくれたのかも・・・、出席する」とのことで「オレ欠席するが、何かあれば教えて、1万円ぐらいくれるかも・・・」と、家裁には、欠席の押印を送り返した。そして、忘れていた頃、弟から連絡「内容は、遺産の全部を、配偶者である妻に渡す、とあった。何で我々の名があるの、あの遺言書は何???」と3個も疑問詞が付いていた。今回の場合素人のオレでも判るが、司法を煩わさなくても、当然のこと遺産は配偶者に渡るのに、なぜ遺言書など書いたのだろう、叔父は何を考えているのだろうと、不思議だった。

叔父の件は当ブログ1/27日に書いている。「屍（シカバネ）は野に棄てろ、葬式なぞ要らねえ」という考えに、あっぱれな叔父と思っていた。影で、彼の事を「ナマヤケの鉄」と呼んでいる。ナマヤケとは、もう何年も前、彼の実母で、オレたちの“ばあさん”の死亡時「死んだので、今日、焼場にもっていくので来てくれ」といわれ、駆け付けると、棺桶と線香、喪主夫妻は平服、オレたち兄弟は喪服と、けったいな雰囲気。普通のワゴン車がきて、焼場へ。「2時間ぐらいかかるから、食事でも」と町のうどん屋へ。焼場の窯から出てきた“ばあさん”まだナマヤケで、煙を出していやがる。それを見て合掌して「はいさようなら」と解散した。「くそう、犬コロみたいな扱いしやがって・・・」と思った。ばあさんもその娘のオレの母親も、冠婚葬祭には普通の人だった。「葬式なんてくそくらえ」という「ナマヤケの鉄」はあっぱれなおっさんだとも思った。

何故遺言書なぞ書いたのだろうと、ふと思い出した。“ばあさん”は人生の半分は我が家で暮らしていた。「私の貯金がいくらかあるから、それをお前ら兄弟に渡るように、鉄に言うておくから」とよく言っていた。「はいはい」といい加減な返事をして笑っていた。そんな会話が、「ナマヤケの鉄」の行動の、理由かな。オレの中で、あっぱれな男が、汚物（汚点）を垂れ、波紋が一つ二つ揺れたようだ。男をさげたなあ。なんて、オレも、臭いことを言ってい

るなあ・・・。名前の“鉄”とオレの“隆久”は、じいさん、つまり彼の実父の命名のようだ。名前としては、“鉄”はいい名だ、オレのは、いまだに好きではない。大阪府立高校の国語の教師だったらいい。
図版は、4/23～4/28 個展に出費予定作品。気に入っています。

0046 ボケの花の話 090312

生物学の先生たちの話を読んでいたら、花にしろ、虫にしろ、観察することが一番大事なようだ。今まで、生きものをじっと観察したことなどない。そう言えば、蟻をじっと見ていたやつ、ネズミを飼っていたやつ、魚の水槽を眺めていたやつらが居た。ヘンなやつらだと思っていたが、そんな事をいうやつがヘンだった。我が家では、犬はずっと飼っていたので、彼らの上っ面の気持ちぐらいはつかめるが・・・。ただ犬ことで自慢できるのは、犬が俺を好いてくれる事です。好いてくれるのが、女の方でなくて残念だけど、今日も知らない犬が道端でオレに寄ってきて、撫ぜてやると、オレの足元に寝そべった。飼い主が不思議な顔をしていた。

楽しみにしている花がある。庭にある小さいボケ（木瓜）だ。山に登った時「岡村さん花がきれいだよ」澤山さんが、そう言いながらいつも花の写真を撮っている。オレ「そうですね」と言いながら、心の中で「何で花なんか、オレのアトリエの中は、色がいろいろ、百花繚乱ですよ」と思っていた。山の花は、夏の1, 2か月の間だけ、岩や砂の上に咲いている。ほとんどが1センチぐらいと小さく、派手さはないが、色はきれいな白、黄、青、紫、ピンクとそれこそいろいろだ。山の上は、人が歩く時は天候も穏やかな時だが、夏でもいったん天候が崩れると、風、雨、雪、急激な温度低下と環境が半端でない。山の花はそんな環境で頑張ってる咲いているのだ。山の話になると夢中になって、脱線したがボケの話に戻ります。

我が家に居られるボケさん、花の色は白に少しピンクが入っている。二月の極寒の日々、と言っても大阪の極寒はたいしたことないが、「ボケさんいかが」と覗いたら、硬い、蕾になるだろうゴマ粒状の塊が枝に付いているだけで、多分枯れてはいないだろう、と思われる状態だった。また見ると、ゴマが少し膨らんだような。そしてまた見ると、茶色の枝とか、塊とかに、そぐわない緑色が塊の殻を破って出ている。「おお、いよいよ、春か」と思いつつまた見ると、むくむく大きくなって、米粒大の玉、これは将来花で、横に緑の破片、これは将来の葉になるのかな。根元の雑草を手でぬいて、ボケのまわりに侵入している、よその木の枝を切り、ハサミで幹をたたいて、「ボケさん、早く咲け」と言ったら「いまさらなにを・・・年にいっぺん覗きに来て、ちょっと周りをきれいにしてくれるだけかよ・・・」とは言わないのが憎いね。

図版は去年のボケさん。4/3の日付だ。こうなるまで、まだ20日ぐらいかかるのか。今のデジタル写真は、パソコンに、日付けはおろか、シャッター速度、絞り値まで記録されていて便利だ。

0047 精進料理 110312

去年高野山のお寺で昼食に精進料理をいただいた。中身は忘れたが、うまかった。禅宗の雑談話に、典座という言葉がよく出てくる。読んでいると、禅宗のお寺の中の、僧のコックさんだと、わかってきた。“てんぞ”と読んでいたが“てんぞ”と辞書に出ている。良寛さんの本の中に、修業時代の一人の兄弟子を絶賛している文章があった。今手元がないので、覚えているおおよそをいうと「私は、その兄弟子が、素晴らしい宗教者、悟った人だと思っている。その人は、座禅も、問答も、勉強もせず、黙々と日々我々のために食事を作ってくれた。修行時代には、話もしなかった。会えなくなった今、その人が、一番の宗教者と思っている」というような詩だったと思う。解説には、これは道元の話から来ているのではと載っていた。次にその道元の話。

江戸時代に生まれた良寛さんが尊敬してやまない僧、鎌倉時代に永平寺を作った禅僧が道元。その道元が血気盛んにいざ勉強と、中国に船で渡って、着いた時の話。長く船に閉じ込められ、一日でも早く大きな寺に行って、勉強がしたいと、これはオレの想像だが、競馬馬が走る直前の、いきり立った“入れ込み状態”だったのだろうか。船の中に、60歳ぐらいの中国僧が乗ってきて、日本産のシイタケを買い求めている。尋ねると「〇〇寺の典座」だという。「その年で、若いものにまかせず、わざわざ、なぜ？」中国僧は、150キロも歩いて来て、日本産のシイタケを求めてすぐまた帰ろうとする。「私はこれが仕事です。修行です。他の人に譲れませんか」道元が不思議がって「そのお年で、座禅や公案を考えたりしないで、台所の事ばかりしていて、おもしろいのですか」またオレの想像だが、下男がするような、食材の買い出しという下働きが・・・そんなしょうもない仕事は、人にさせたらは・・・とエリートの道元。中国僧が「あなたは修行の何たるかがわかっていない。機会があれば〇〇寺にいらっしゃい。話をしましょう」またオレの想像だが、「馬鹿もん、人の飯を作るのも、公案を解くのも同じ立派な仕事なんじゃ、修業なんじゃ、悟りが開けるんじゃ」ということかな。

ああい話だねえ。人間、自分で、自分の目で、人や物やら、目に見えない物を見て、“いいもの” “すごいもの” を発見する。人が進めてくれるものも、“いいもの” “すごいもの” もあるだろうが。自分で探さねば。オレも修行をしなければとも思うが、この言葉、ちょっと抹茶臭いね。ただ言えることは、今のオレのアート、修業というより、離れる事かな。「何かから離れないと」これが一番の大事だ。と、わけのわからないことをつぶやくオレ。人生はこれだぞと自戒しつつ、もう少し豊かにもなりたいなど、俗っぽいね。

図版は、昔こんな坊さんよく見かけた、と思出す。今でもどこかにおられるかな？

0048 京都ぶらぶら 120312

0049 仮説で攻める 170312

家族が、数字をあてはるパズルに凝っている。難度の高い物はどうしても解けない。“ヒント”など読まずに、強行突破しようと意地になって考える。「つまらぬことに頭を悩ませて」と思うが「頭の体操になっていいよ」と言われると、そうかなとも思う。この4.5日ブログをさぼって何回か挑戦しては敗退。たとえば「ここに②③④のどれかの数字」と分かっている、そのうちのどれかが決まらないうちは進まなかった。頭の中で、では仮に②③④の数字を一つづつ入れてみようかと思ったが、「それはずるい」と独り合点。でもその考え方は「仮説をたてる」解釈すると自分を納得させて、②③④の数字を一つづつ入れてみたらなんと進みだした。スイスイ解けるではないか。オレの、こういうところが頭が固いという典型か。

科学の分野で、たくさんの仮説を立てて、いくつもいくつも試して、やっと一つの物を“掴んだ” “発見した” “証明した” という話をよく聞く。オレのような科学畑に縁のない美術家が興味あるのは、陶磁器。土を捏ねて、形を作って、窯に入れて1000℃で焼くと陶磁器ができる。その土に何かを混ぜる、こね方を変える、そして焼く温度やら時間を変えると、仮説と実験を繰り返して、出来あがったのが、今や有名な“セラミック”だ。頓珍漢な事を言っていたらどなたか指摘して下さいよ。陶磁器は世界の4大文明などと言われる処で紀元前何千年も前に作られている。5000年以上の間、多少品質が上がったり、形が変わったりはしたが、器としての用途の陶磁器でしかなかった。何かを混ぜて、温度を変えてと“仮説”を立てて、実験を繰り返したやつはえらい。この50年で、鉄より硬い焼き物、工業製品の部品になる焼き物ができるとは・・・

絵を描く場合、若いころから、今でも絵の出来栄えに波があって、いい時と悪い時の差が大きい。オレのように「色面一発勝負」というような絵は「方法とか技術」という世界ではない。その時の気分、体調、感性が大いにかかわってくる。「方法とか技術」で描いていると、ベテランになれば失敗も無くなって、「この大きさなら何時間で出来あ

がる」と大先生すましている。すましてなんかいないぞ、と怒る大先生もおられようが、「職人に近い仕事は楽で、しかも、儲かっていいなあ・・・」なんて憎たらしいこと言って、ゴメン。「方法とか技術」で描かないオレたちは、いくつになってもまごまごしている。“仮設”とは言わないが、「あれがいかんのか」「あれをこうしてみようか」「あれがあれでいかんのなら、あれをああしてみようか」「いやいやそれをそうしたら・・・」（もっと続けたいが、うるさいと罵られそうなので）というふうに、“思考”というよりは“ぼやき”に近い状態を繰り返している日々です。たまには、浮かび上がるが、すぐに潜ってしまう。溺れぬように・・・。

図版は、「いい絵が出来上がった」と、近作。「展覧会に出すぞお」70×50センチ

0050 山小屋 210312

今、夕方6時、恵那山頂小屋にお邪魔してこれを書いています。「いや～、しんどかった、寒い、一杯飲む前に、ブログ用文章をやっつけよう」小屋の中は真っ暗。荷を開けて、ヘッドライトを点灯、濡れた靴下を変え、持ってきた服を着込み、シラフを出して座布団がわりに敷き、湯を沸かす。ローソクを二つ灯したらぼんやり明るい。

山小屋と言ってもいくつかパターンがあります。今、居るのは、県か市が山頂に作った小屋で、施錠はせず、「困った時は非難に使いなさい」というタイプ。床は板敷き。我々は、野外で泊まれるように、テントも持ってきたが、小屋をお借りすることに。何処の山小屋も冬場は真っ暗。というのは、冬の高い山では、雪が屋根まで積もる。で、この小屋主も、冬の間、窓が潰れないよう板を釘で打ち付けて山を降りる。雪国の人なら常識かもしれないが、雪の多いところでは二階に、冬季出入り口が付いている。この小屋は、どなたかがインターネットで書き込みをしていた。「建築設計ミスで、入り口付近に庇の雪がどっさり落ちるようになっていて、硬いスコップを持参しないと入れない、ピッケルで代用できるが大変だ」やっとならして小屋を見つけて、入り口を見ると、なるほど案の定、書き込みどおり雪がすごい。扉の前に人の背丈ほどの雪が落ちて積もっている。うれしいことに、扉の横に鉄製のスコップが吊るしてある。扉はかぎが掛かっていないので開くが、手が入るほどにしか開かない。狭い場所でスコップをふるって、階段を作り、雪を掻き出してゆく。先日の富山での雪かきを思い出すが、登ってきた後では体力が残っていないので、なかなかはかどらなかった。

扉が開いて、靴を脱いで、お茶を飲んで、ひといき。ペットボトルに入ったお茶が凍りかけている。一晩お世話になります。感謝。図版はシラフに潜って、カレーを温める澤山さん。山の話は次回。

0051 ヒヤリハット 230312

近所に、いつも車が何十台も行き来する交差点がある。もちろん信号がある。立派な歩道が付いた新しい道路と、歩道の無い道路が交わる交差点。その手前を歩いていたら、子どもを後ろに乗せた自転車のお母さんが、ふらりとスタート。まだ赤信号のはずだけど、と見ていたら、直進車が突っ込んできた。「危ない」と叫んでしまった。その母親はオレを見て頭を下げてそのまま行ってしまった。車はなんとか手前でスピードを下げた。そう言えば以前にも同じここで、30歳ぐらいの“あんちゃん”が同じように赤信号で歩きだし、トラックが急ブレーキをかけていた。どうも若い連中はもう“すぐ青信号”でスタートするらしいが、左右確認ぐらいしろ。車も“もうすぐ赤信号”なら停止しろ。あわや交通事故。山でも、あわや滑落事故なんて見ると、肝が冷えるね。

ああ“クワバラクワバラ”と、歩きながら「ひやりとしたな」「はっとしたな」と頭の中で思っていた。「ヒヤリハット」という言葉があったと、帰って辞書を見たら、無い。タレント言葉かな、学生言葉かなとWEBを調べたら「ヒ

ヤリハットの法則」「ヒューマンエラー」などと並んで、最近使われるようになった立派な言葉だ。事故、惨事の現場調査で使われているようだ。

高いところには自信があると言っていた人、背丈の高さの脚立の上に立って作業ができる彼女が、階段から落ちて骨折した。もう高いところには登らないでくださいよ。

先ほどの自転車親子、車が当たってきたら、少々の怪我では済まなかっただろう。

オレ、山に登って「ヒヤリとしたり」「ハットしたり」があれば引退しようと思っている。若いころは2,3回あったけど。「雪の斜面で滑った、すぐピッケルで止まってよかったけど」「足の中のタイミングが合わず、あわやスッテン、大怪我寸前」

車で、住宅街スピード出すな、近所のジイサン。自転車で、歩道を飛ばすな若い兄ちゃん姉ちゃん。なんて“ぶつぶつオヤジ”になっているかな。

今日は筆が走った。気持ちがいい。何日ぶりだ、この快感。「いい絵を描かないとね」

図版は、自己紹介用の絵

0052 アイゼン 250312

先日登った恵那山、2000メートルを少し超えるぐらいの低い山ですが、3月の今、日本海からは遠いとはいえ、まだまだ雪があった。雪は日本海に近い富山、新潟の山にはドッサリ降るが、日本海から離れるほど積雪量は少なくなる。登山口に、「頂上まで3,4時間」と書かれていましたが、雪の季節の今、テント、食糧を担いでの登りは、5時間もかかってしまった。大阪から澤山さんのJFクルーザーで5時間、歩きだしたのが12時を過ぎていました。ここ恵那山は、ほとんどの人が日帰りのようだが、零度近い雪の中、コンロに食料、シラフにくるまって寝るのは、格別の楽しさ。「そんな事が楽しいのか」という人には分からないけれど、“おもしろい”ですぞ。

登り始めてすぐに、凍っている。雪が融けかけ水が流れ、また寒さが来る。そんな繰り返しで、“氷”になっている。下を見たら「ヒェ～落ちたらやばいぞ」というところ、氷をまともに踏んだら滑落だ。「70歳になって体力の無くなったところは技術でカバー、アイゼンも“やすり”を掛けています」と山岳部出身、山の事なら何でも知っている澤山さん。「山の事だけはよく知っている」と若い奴らの揶揄も泰然自若。しかし危険な冬山、連れて行ってもらわないと、オレひとりでは、危なくて行けない。今回も、アイゼン、ピッケルを使わず、靴底の前後左右のエッジを効かせて、滑る事無く歩いている。

さて怖がりのオレ、雪の季節はアイゼン、ピッケルが必需品。ピッケルは常に杖代わり。急斜面では雪に突き刺して身体の固定。邪魔な時は背中にさして歩く。「アイゼンも“やすり”を掛けています」これには驚いた。オレ、いまの十二本爪アイゼンを買って四半世紀経つが、メンテナンスはねじを締めなおしたぐらい、靴が変わった時、ベルトを調節したぐらい、アイゼンの先に“やすり”を掛けた事などした事がない。なるほど見ると、“まあるく”なじんでいる、鋭さはない。ま、そんなに危ないところには行かないし、リュックの中で水筒に穴が開く事もないし、とそのままである。

当ブログ3月3日分に投稿があった

「日本に脳死議論が出てきた20年まえから、脳死を人の死にすることに反対しています。＜中略＞心臓が止まるのが死、それをなぜ脳で判定するように変えねばならないのか、それは臓器移植のために移植を進める医者が必要としている、その一点だけなのです。医療技術の進歩で他人の臓器を移植して命を長らえることができるようになった。＜中略＞しかし、人が死ぬのを待って生きようとするのは行き過ぎだ。あまりに科学技術信奉の、行き過ぎ、ヒトの死を運命と思えない現代人の不幸です。不幸に不幸を重ねています。ぼくは医者ですが脳死をヒトの死にすることに今も反対しています。」

脳死議論が騒がれていた頃、脳死とは何か知らなかった。何の議論で何の目的なのか知らなかった。いくつかの本を読んでおぼろげにわかった。そして今、臓器移植の報道が時々聞かれる。おそらく外国ほど頻繁には行われていないのだろうね。オレ二つの事を考えている。一つは人間の死、個人の人間の生命が終わる時に、報道も政治も司法もじっと静かにただ頭を下げるだけでいいのではないだろうか。死生観はそれぞれ違う。生命が終われば、そんな考えも、叫びもすべてが終わる。その人のすべてが終わる時は、何も考えずに頭を下げたい。「事故で、もう助からないとわかったら、自分の臓器を、どうにでもしてくれ」と生前に言っていた人からは、ただ頭を下げて、もらえばいい。投稿氏とは、考えが交錯するが、その先生は人間的に立派な医者だ。何人も人の生死を見つめてきている。「人が死ぬのを待って生きようとするのは行き過ぎだ」となるのだろうね。

もうひとつは、現代の医療の行き過ぎです。今の日本どんどん寿命が延びてきて、知人の親の葬式に行くと、100歳ぐらいの方が多。オレの若いころは60歳を超えると、じいさんばあさんで、70歳と聞くと「すごいですね」と言っていたように思う。オレのまわりにも、100歳ぐらいの方が何人かおられて、ほとんどの方が、在宅ではなく、何らかの施設に入っておられる。100歳ぐらいの方々は、昼間もぼう~っと、ベッドで横になったり、車いすに押されて食堂に行ったり、されている。そんな施設は、冷暖房完備、三度の食事が出る、医者が常駐している。これが本当に良い風景だろうか。本当の福祉だろうか。いつまでも続くのだろうか。現場、現状を知らないオレが、えらそうに言える立場ではないかも。

不老長寿を願うこと。病気になったら治りたい、治してやりたい。死にたくない。こんなことは、人生の永遠のテーマですね。

とある政治家が、「子どもは票につながらないが、老人はたしか1票」とぬかされた。ここは不思議な国だね。図版は最近できた絵の部分。

今朝三宅さんから電話があった。「タブレット使っている？」最近の携帯電話のモバイル版は賢いね。ノートパソコンとIT機能が付いて、ペンで絵も描ける。その“タブレット”とは・・しばらくわからなかった。彼は、グラフィックデザイナーで、蕎麦屋を営んでいる。文章がうまい、絵がうまい、写真がうまい、オレが勝っているのは歳だけかな。

“タブレット”は板状のもので、専用のペンで、絵や図形を描く。オレも持っています。マウスで描くには心許無い、細かい作業が必要な個所に出くわすと、それを使って線を引いたり、色付けしたりと、ささやかに活躍しています。

彼が言うには、イラストレーターや漫画家が、下絵を手書きで描き、それをパソコンに取り込んで、パソコンで仕上げをする。パソコンで“タブレット”を使って絵を描き上げていくようだ。「便利できれいで、買おうと思っている」

“タブレット”で絵を描く・・・？若い人はパソコンの画面で「描く、見る、造る、感じる」ができるのだ。オレは、文章、絵、写真をパソコンの中で、造ったり加工したりするけれど、画面を見るだけではわからない“ピン”とこないの、プリンターで印刷をして、それを見、それを吟味して、ここを修正、そこを修正とそういう作業を繰り返してやっと納得する。パソコン画面を見るだけで納得できる人達はすごいね、若いねと思う。

絵は、キャンバスやら紙の上に、チューブから出した絵具を、筆で塗る。筆から伝わる感触が、描いている、造っている、出来つつある、と感じ、確かめ、作業をする工程を経ないと実感がわからない。目の前で乾き切らない絵の具が盛り上がり、隣の絵の具と交じり、隣の絵の具に侵入、浸食して少しずつ乾いてゆく。下に塗られた絵の具がうっすら滲みでたり、全く隠れているにもかかわらず下から叫んでいたり、上に塗った絵の具が、下の絵の具の強さに負けてひっそりと主張していたり、下と上の絵の具同士が響き合って、全く別の色合いになったり、様々な偶然、様々な思惑が絵を造り上げてゆく。

“タブレット”で漫画を描くのに、どういうソフトを使うの、と聞いたら、買った“タブレット”に付いているみたいよ・・・と。オレが使っているのは“ワコム”製の2万円足らずのものだけど、彼が買いたいと狙っているのは、4万円足らずの製品だという。パソコンでは絵は描かない、と決めているのに、話を聞いていたら少し色気が出てきた。なんと言っても、50歳ぐらいの頃に、乗用車一台ぐらいの資金で、CGのプロに、とアップルコンピューターを買ったんだ、ものね。

蕎麦 “むもん” のブログは 下記 蕎麦好きの方は是非行かれては。

<http://mumon-soba.jugem.jp/>

図版の絵は10年前に描いた、海の風景画です。